

2016年度東海村文化祭【公募写真展】講評

2016年10月16日

審査員 水谷 勉

今回の応募数は昨年を若干下回りました。少し残念です。

多くの方の参加が待たれるところです。全体的にはベテランの方々を中心にそのレベルも高く、今後の活躍が大いに期待されるところです。

昨今の撮影機材の進展により、誰でも簡単に撮れる時代になりました。表現者にとっては厳しい時代と認識すべきです。「強い心」をもって取組まなければなりません。

「被写体を発見する目」「表現方法」「問題意識」「美意識」などを念頭に現場に立つことです。まさに「知は現場にあり」です。ただ何となく撮ったのでは作品になりません。めざす被写体に正面から向き合って美しく、力強い作品づくりに精進してほしいと思います。

入賞者は次のとおりです。

村長賞 「廃屋」 渡邊 二男

生活の痕跡を残した廃材、使い込まれた家具など時代をくぐり抜けてきた生活用具がモノクロムで捉えられている。組写真構成は「全景」「内部」「外景」と、距離的には狭い感がありますが、組としての配慮が見られる。

特に、(3)の庭先に咲く花の描写が、確かにあった人の営みに繋がった。滅び行くものの内面への視線が秀逸。

村議会議長賞 「光芒」 高杉 則子

写真は撮る人の感情性によって受け止め方が違ってきますが、男性的な強い攻めの姿勢で大自然と正面から向き合っているというベクトルが感じられた。画面全体の強いエネルギーは、作者の意志の強さなのかも知れない。

教育長賞 「朝日に微笑む」 成田 富夫

自然界の小鳥たちが巣の中で柔らかな朝日を受けて輝いている。写真の原点は「愛」にある。

まさにいま作者のその眼差しが、小鳥たちに注がれている。痺れそうな緊張感が伝わってくる。

奨励賞1 「未来」 星 豊

卓越した光の読み方、銜（てらい）のない正面性。被写体への観察眼、基本に徹した完成度の高い作品。

奨励賞2 「里山の華」 根本 哲成

繊細な美意識、緻密な計算、対象への知識、視点の研究。等々が実を結んだ傑作。

奨励賞3 「涼」 古川 千枝子

被写との出会い、心の昂ぶり、その時どこまで追えるのか、上部の観光客との量的せめぎ合い、どこまで入れるのか、心の葛藤が続く。

奨励賞4 「初夏の樹林」 佐藤 次男

既視感のない新しい試み。「芸術は心の葛藤から生まれる。」いつも狙いを考え迷い答えを出す。

いつも成功するとは限らない。その一歩、一歩が力となっていく。
一つの答えが出たようだ。

奨励賞5 「静寂」 渡邊 よしえ

レンズの画角、雪の質感、ぎりぎりの露出、いろんなせめ合いの中から出た答えがこの場の情感をサポートしている。中央の淡い光が揺れている。

佳作1 「突進」 黒沢 芳枝

高揚する感情を押さえ、「引きの意識」をもって祭りと向きあった。撮られないように。力強いシャッター音だ。伝統的祭事が品格を添えて美しく、力強く再現された。

佳作2 「煌煌」 田中 克朋

カメラポジションの選択、露出の選択、美しさと力強さの再現、現代社会への眼差し。

記録か表現かのぎりぎりの選択。東京オリンピックが楽しみだ。

佳作3 「水の宝石」 齊藤 美智子

モチーフを発見する目、動きのある画面構成、写真的美意識と想像力。画面から作者の驚きの声が聞こえて来るようだ。これに勝る表現要素はない。

佳作4 「夢の跡」 薄井 實

深い歴史へのまなざし。被写体への緊張感、聖地としての美しさ、静寂感、言葉の抑制が表現力に。青の世界の静かなる力作。

佳作5 「至福のひとつき」 会沢 勝男

やさしい出会い、やさしい眼差し、幸せ家族。豊かな時間の流れ、爽やかなひとつき。既視感のある作品だけにやや新鮮味に欠けるが、作者の記憶の一片がダブって見えた。